

六月のテーマ 怒り方叱り方

目上の立場

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二二—一九九九）のこぼれを掲載します。



え・古屋智子

Y氏はある店の社長だが、几帳面な性格で、店員のだらしないのが、はなはだ気に入らない。

中でも、洗面所の水道栓のひねりが不十分で、使ったあとで、いつもたらたらと水が漏れているのが、不愉快でならない。

いつも店員に注意するのだが、どうしても励行されない。やかましく叱ると二、三日は洩らさないが、やがてまたたらたら流すようになる。

Y氏はいまますますならなかったが、ついにある時、ほん然として悟った。自分のこのやり方は、まちがいだ。今までは店員たちをやかましく叱ってばかりいたが、今後はまず自分から進んで喜んで洩れている水道栓をしめるようにしよう。

彼はこれを実行した。目下に対して不平を捨て、洩れているところを見ると、にこにこした気持ちで、行って固くしめ直してやる。けしからん、などといった気持ちは少しも起こさない。母親が子どもの不始末を喜んでぬぐってやるような、そうした心にも似て、心から温かくやり続けた。

何日かたつてふと気がついてみると、いつのまにか水を流し放しにする者が、非常に少なくなっているではないか。今日は流れていないかと洗面所に行つて気づくことが多くなり、Y氏は狐につままれたような気持ちだった。驚くべき変化だった。一体どうしたのであるうか。

目上が目下に対してもつべきものは、愛である。愛は抱く、温める、そして万物を産み育てる。この愛がまた慈ともなり、目下に対して第一にもつべきものであるとは一応誰しも知ってはいる。しかし現実には、いかにするのが愛であり、慈であるか、案外分かっていない。

実践は簡単などころから始まる。言うことをきかない目下を責めないこと。憎まないこと。不平不満をこちらが抱きながら、欠点を変えさせよう、改めさせようとしめないことである。Y氏のごとく目下のだらしないさを、喜んで始末してやることである。そうした心になった時、事情は好転してくる。

社長が喜んで水道栓をしめているのを見て、社員は心打たれる。目下

の非は己が非の映れるなりととる心こそ、愛の表われである。

この愛の真心を知った時、人は自ずからにして変わらざるを得ない。感動はここに発する。感激はここより湧く。さらに目上のこうした行動を見たり、聞いたりしなくても、真心は、自然に目下に伝わるのである。

目下の人の行ないは、目上の心意の反映である。すなわち対者我影（たしやがえい）である。社長―社員、店主―店員といったような、上にある人と下にある人とは、お互いにそれぞれ反映し合っている。

こちらが憎いと思えば、下もそうなる。一方が怒れば、他方も腹立ち、互いに複雑微妙に、また単純無雑（むざつ）に相映（あいえい）じている。上下の関係が緊密になればなるほど、その反射はますます緊密となっていく。これを知らずに下の人だけ責めるのは、もつての他である。

この意味において、目下の人は目上のよき先生である。願つてもなき良師である。心から慎んで教えを乞わなければならない。

『丸山竹秋選集 第一巻』より